

飛鳥時代須恵器杯Hの地域性について

筒井 崇史

1. はじめに

近年、飛鳥時代の須恵器杯H^(注1)について、地域ごとに形態差・調整差の存在が認められるようになった。

たとえば、筆者がフィールドとしている丹後地域では、口径14cm前後で底部または天井部のヘラケズリ調整を省略したものがみられるのに対して、飛鳥地域では口径が12cmを下回らないとヘラケズリ調整の省略は確認できない、というような事例がある。丹後地域の近隣では、兵庫県北部(但馬地域)の豊岡市日高町八代宮ノ谷窯跡出土の杯Hにおいても、口径14~15cmのものでもヘラケズリ調整の省略が認められることが指摘されている^(注2)。

筆者は、このような差違が飛鳥時代における須恵器杯Hの地域性を表しているのではないかと考え、本稿の執筆に至ったものである。

2. これまでの研究視点と課題

1990年代に入って、飛鳥時代の土器、特に田辺編年^(注3)のTK217型式の位置づけを巡る議論が盛んになった。これはTK217型式の内容と、各地で出土した土器様相の実態とに齟齬のあることが明らかになってきたためである。

こうした点をふまえて1997年に「古代の土器研究会」が行った7世紀代の土器様相の再検討は、各地の資料を同じ基準で検討していこうとするもので、非常に重要な取り組みであった^(注4)。しかし、佐藤隆氏も指摘するように、TK217型式の暦年代を新しくみたことや須恵器の杯Hと杯G・A・Bの共伴関係について十分な検討が行われなかったことなど、課題を残したまま現在に至っている^(注5)。杯Hに限っても、まず、各地域ごとの土器様相の特色を明らかにすることに主眼がおかれたため、杯Hのあり方が飛鳥地域や隣接地域とどういった違いがあるのかということについて、議論が十分ではなかった。また、飛鳥地域と各地域の併行関係についても、調整や法量についての具体的な検討がなされないまま安易な併行関係の提示にとどまった。さらに、杯Hと杯A・Bの共伴関係についても、良好な一括資料の提示のないまま、議論されていたように思われる。

筆者の立場は、必ずしも古代の土器研究会の取り組みを否定するものではない。こうした再検討を通じて、従来の評価を改めなくてはいけないことがいくつも明らかになっており、筆者もその成果を評価している。しかし、地域間における資料の比較検討、あるいは併行関係を重視した視点が少なかった点は残念であったといわざるを得ない。

本稿では、以上のような1990年代に進められた7世紀代の土器様相の再検討をふまえて、須恵器杯Hがもつ地域性の特色を明らかにすることを目的とするものである。

3. 資料の検討

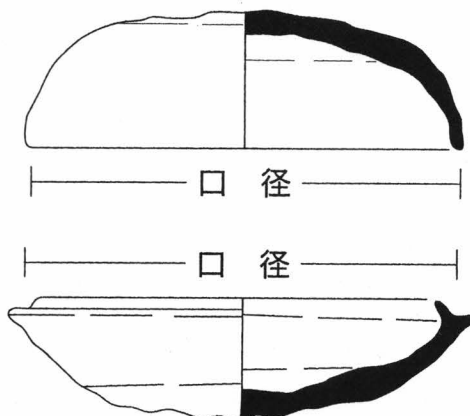
a. 検討の方法

まず、地域間に存在する杯Hの違いを明らかにする必要がある。そのためには違いを反映する要素を抽出しなければいけないが、これには①法量(原則として口径)と②天井部または底部の調整手法のあり方、の2つを検討要素として抽出した。

次に対象地域には、当該期の政治的中心地で、消費遺跡における編年の基準となっている飛鳥地域、筆者がフィールドとする丹後地域、および両者の間に位置する丹波・山城・大和の各地域を対象とした。

ただし、すべての資料を対象として、検討作業を行うことは、その出土量からみて現実的ではないし、また不可能である。そこで、資料をある程度絞り込む必要があるが、これについては、各地域において編年上の基準になると思われる資料、または筆者が実見した資料を取り上げる。さまざまな制約により、今回抽出した資料が必ずしも最良の一群であるとは言えないが、検討結果についてはおおよその地域性を反映させることができたと考えている。

さて、これら抽出した資料群を上述した2つの検討要素によって、グラフ化したものが



第1図 杯H口径図

第2図～第6図である。^(注6)なお、2つの検討要素については、以下のような基準、認識にしたがって、計測、判断した。

杯Hの口径は、第1図に示したように、受部に蓋の口縁端部が接するところとする。これによって蓋と杯の口径の値が同じ大きさとして表されるので、比較作業を容易に行うことができる。なお、蓋の口径については特に問題がないが、杯Hの口径については実際に計測できなかった場合、実測図

の断面側の径を計測して、2倍とすることで算出した。

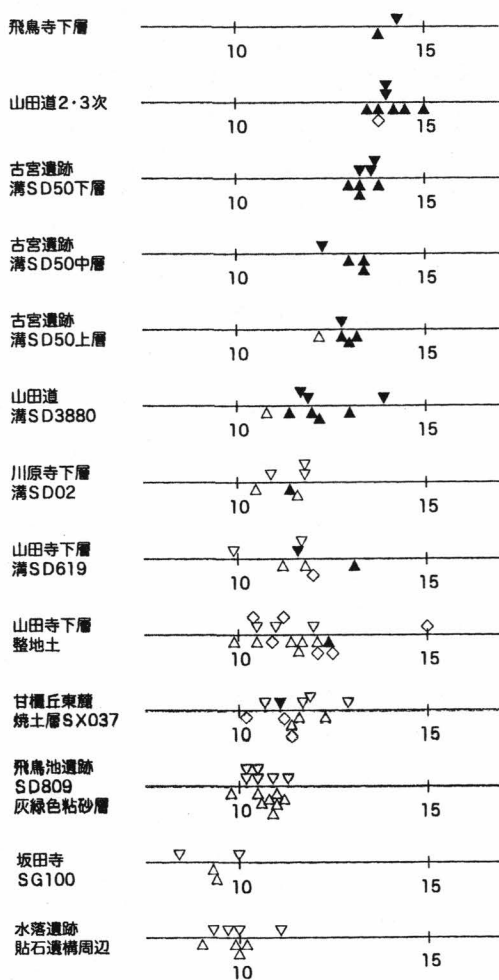
天井部または底部の調整手法については次のような認識の立場にある。ヘラケズリ調整は、ロクロ台から切り離した後の痕跡を、再度ロクロにのせてヘラで削り取る作業をいう。手持ちヘラケズリ調整はこの時期にはほとんどみられず、検討の対象とはしない。ヘラキリはロクロ台から切り離したままのものをいう。切り離し方の程度でヘラオコシと呼び分けることもあるが、基本的にはヘラキリの一種と理解する。なお、筆者自身が調整手法の確認をしていないものについては報告書の記載にしたがった。

各グラフにおける資料の配列は、飛鳥地域の杯Hの法量が時間の経過とともに縮小していきと考えられていることから、各地域の杯Hも法量が縮小していくように配列した。

b. 飛鳥地域の資料

飛鳥地域は、7世紀代の大半を通じて大王(天皇)宮がおかれた地域であり、当時の日本の政治的・文化的中心地であったことは間違いない。また、大王宮だけでなく寺院や豪族の居宅、初源的な官司機構、さまざまな生産機構が集中していたことが発掘調査によって明らかになっている。飛鳥地域の土器編年は、西弘海氏によって5期区分編年(飛鳥Ⅰ～飛鳥Ⅴ)^(注7)が示され、その後、新出資料によって若干の細分や暦年代観の変更が行われている^(注8)。なお、飛鳥地域の土器資料には、良好な層位資料が少ない点は十分に認識しておくべきであろう。

第2図は飛鳥Ⅰ直前段階から飛鳥Ⅱ段階にかけての標式遺構、並びに重要と考えられる遺構出土の杯Hを配列したものである。これらは飛鳥寺下層出土資料から水落遺跡出土資料に向かって、法量が縮小していくことを基準に配列してある。各資料をもう



- ▼; 杯H蓋 (回転ヘラケズリ)
- ▲; 杯H (回転ヘラケズリ)
- ▽; 杯H蓋 (ヘラキリ)
- △; 杯H (ヘラキリ)
- ◇; 杯H蓋/杯H (調整不明)

第2図 飛鳥地域出土杯H法量分布図

少し詳しくみると、飛鳥寺下層で口径14cm前後、山田道(第3次)黒褐色土で口径15～13.5cm前後である。古宮遺跡S D050(上層)では口径13cm前後である。山田道S D3880では口径12cm前後である。川原寺下層S D02、山田寺下層S D619・整地土、甘樫丘焼土層S X037の各資料はおおむね同じ法量のグループに属し、口径12～11cmである。飛鳥池遺跡灰緑色砂層はこれよりも若干法量が小さく口径11～10cm前後である。坂田寺S G100で口径9.5cm前後であるが、報告資料が少なく、詳細は不明である。水落遺跡で口径10cm前後で、この資料を最後に、飛鳥地域における杯Hは消滅すると考えられている。

ヘラケズリ調整の省略についてみると、川原寺下層S D02からヘラキリのものがみられるようになり、甘樫丘焼土層S X037以降ではヘラケズリ調整を施すものはみられない。このことから、法量の縮小とヘラケズリ調整の省略の間に相関関係があると考えられる。

なお、飛鳥地域やその近隣では当該期の窯跡は知られていない。飛鳥地域への須恵器の供給は古墳時代以来、大阪府の陶邑窯跡群が主体的に担ったと考えられ、このほかに各地からも「貢納」という形で供給されたものと考えられる^(注9)。

c. 各地域の出土資料

①丹後地域(第3図)

集落や窯跡の資料にくらべると、古墳や横穴などの墳墓資料が充実している。当該期の資料については橋本勝行氏や筆者のまとめたものがあり、参照されたい^(注10)。ただ、これらはあくまでも地域内に限定した検討であり、周辺地域との比較は十分に行うことはできない。

集落遺跡としては、京丹後市大宮町裾谷遺跡、舞鶴市浦入遺跡の住居跡資料を取り上げた。墳墓資料としては、京丹後市大宮町大田鼻横穴群、同里ヶ谷横穴群、京丹後市丹後町高山古墳群の資料を取り上げた。窯跡資料は、層位資料として評価できる京丹後市久美浜町堤谷窯跡を取り上げた。

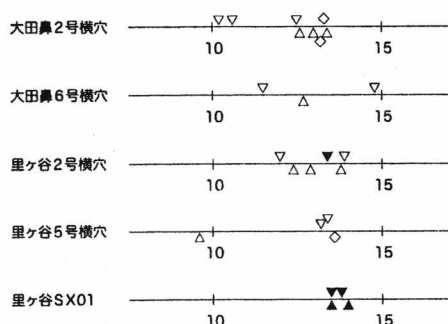
以上の資料から次のようなことが確認できる。まず、口径13.5～14cmぐらいでヘラケズリ調整を省略するものが現れる。ただし、ヘラケズリ調整は口径12cmぐらいまで確認できる。また、最小値は、口径12cm前後までは量的にも確認できるが、12cm以下になるとその数量は激減し、資料の提示は行っていないが、10cm以下のものはごくわずかの数量しか確認できない。さらに、堤谷窯跡の灰原について、口径12～13cm程度の杯Hを主体とする1号窯灰原第Ⅳ層の直上に、杯Bを主体とする1号窯灰原第Ⅲ層が堆積していることから、杯Hの生産から杯Bの生産へと、連続的に行われたと考えられる。この杯Bには、内面にかえりをもたない蓋が主体的に共伴することから、杯Hの生産は飛鳥時代を通じて行われた可能性は高い。

②丹波地域(第4図)

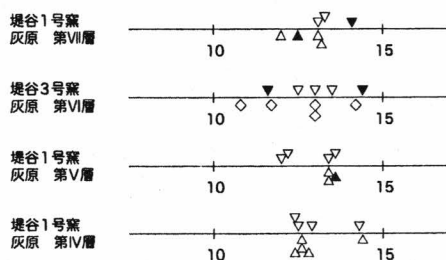
ここでは京都府内を対象とするが、丹波地域は水系によって大きく2地域に分けられる。すなわち、北部の由良川水系(綾部市・福知山市など)と、南部の桂川水系(亀岡市・八木町・園部町など)である。両水系地域とも集落や古墳、窯跡などの遺跡が分布している。ただ、総合的な検討はほとんどなく、古代土器研究会による資料収集と、両丹考古学研究等による研究報告があるにとどまる。^(注11)

丹波地域の出土資料も多数に上るが、ここでは由良川水系の綾部市味方遺跡の住居跡資料と、南部の園部町壺ノ谷窯址群の出土資料を取り上げる。検討資料が少ないため、地域性を十分に反映できていない可能性がある。味方遺跡では竪穴式住居跡や土器溜まりから杯Hなどがまとまって出土している。なお、綾部市域では当該期に集落・官衙・古代寺院からなる青野・綾中遺跡群という大規模な遺跡の存在が知られているが、杯Hという器種に限ると良好な資料が少ない。この点は青野・綾中遺跡群の成立・展開を考える上で重要

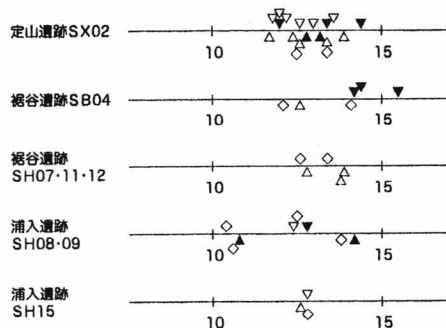
墳墓出土杯H法量表



窯跡出土杯H法量表



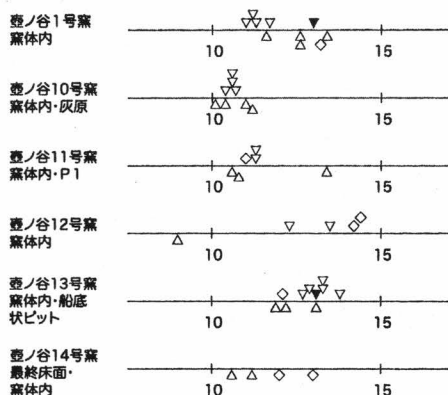
集落跡出土杯H法量表



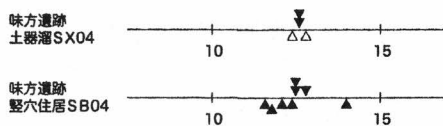
- ▼; 杯H蓋 (回転ヘラケズリ)
- ▲; 杯H (回転ヘラケズリ)
- ▽; 杯H蓋 (ヘラギリ)
- △; 杯H (ヘラギリ)
- ◇; 杯H蓋/杯H (調整不明)

第3図 丹波地域出土杯H法量分布図

窯跡出土杯H法量表



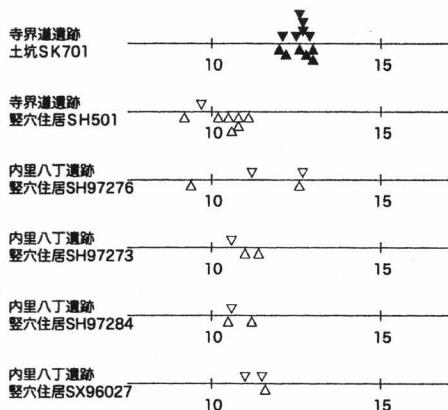
集落跡出土杯H法量表



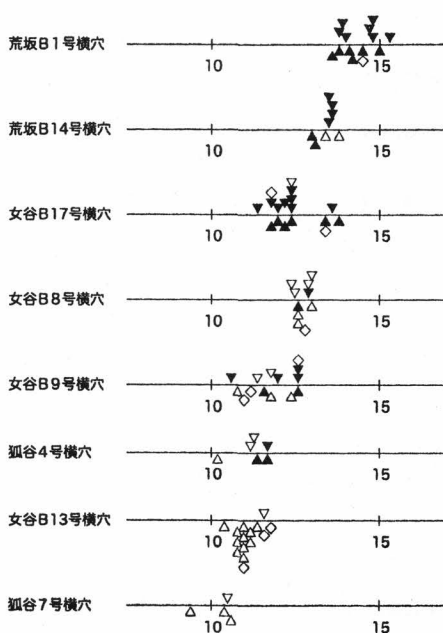
- ▼; 杯H蓋 (回転ヘラケズリ)
- ▲; 杯H (回転ヘラケズリ)
- ▽; 杯H蓋 (ヘラキリ)
- △; 杯H (ヘラキリ)
- ◇; 杯H蓋/杯H (調整不明)

第4図 丹波地域出土杯H法量分布図

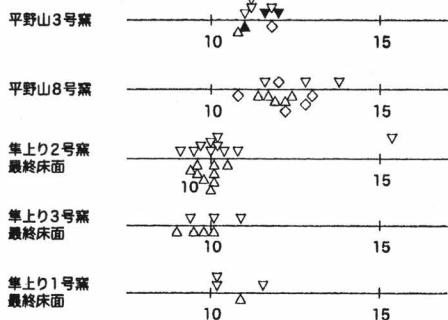
集落跡出土杯H法量表



墳墓出土杯H法量表



窯跡出土杯H法量表



- ▼; 杯H蓋 (回転ヘラケズリ)
- ▲; 杯H (回転ヘラケズリ)
- ▽; 杯H蓋 (ヘラキリ)
- △; 杯H (ヘラキリ)
- ◇; 杯H蓋/杯H (調整不明)

第5図 山城地域出土杯H法量分布図

である。壺ノ谷窯址群は当該期から奈良時代前半にかけての窯跡群である。規模の違いはあるものの、京丹後市堤谷窯跡群と同様の時期である点に注意したい。墳墓資料も良好なものがあるが、今回は取り上げなかった。

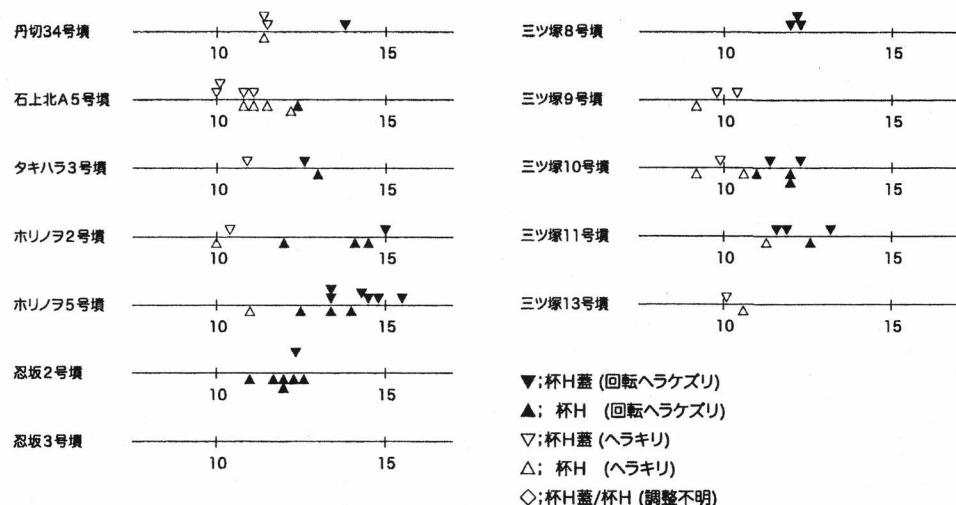
以上の資料から次のようなことが確認できる。北部の綾部市域では口径12～13cmぐらいでヘラケズリ調整を省略するものが現れるが、口径11.5cmぐらいまではヘラケズリ調整を施すものがある。一方、南部の壺ノ谷窯跡群では口径13.5cm前後でヘラケズリ調整を省略するものが出現する。しかし、ヘラケズリ調整を施すものが数量的に少ないため、どの段階まで残存するのかは明らかでない。少なくとも壺ノ谷窯跡群ではヘラケズリ調整を施すものが主体的に存在するようには見えない。

③山城地域(第5図)

地域的には、北東部の現在の京都市域、北西部の乙訓地域、南部の木津川水系(=南山城地域)の3地域に分けられる。いずれの地域でも集落や古墳、窯跡、寺院、官衙などの出土資料が知られている。ただ、丹波地域同様、地域的な総合研究は少ない。当該期の土器編年については北西部を対象とした古閑正浩氏の研究成果がある。また、四天王寺創建瓦を焼成したとされる平野山(楠葉)瓦窯跡と豊浦寺創建瓦を焼成したとされる隼上り瓦窯跡の年代等に対する再検討は編年観・暦年代観という点で重要である。^(注11)

京都市内や乙訓地域の資料にも良好なものが多いが、ここでは、南山城地域の資料を取り上げる。窯跡資料としては上述の八幡市平野山瓦窯跡と宇治市隼上り瓦窯跡を取り上げた。両窯跡では古代寺院に供給するための瓦の生産を行っていたが、須恵器の供給先は必ずしも明らかでない。墳墓資料としては八幡市狐谷横穴群、同女谷横穴群、京田辺市荒坂横穴群の資料を取り上げた。これらの横穴の大半は近年調査されたもので、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて営まれたものであることが明らかである。出土量も多く、墳墓出土資料から土器の変遷を考える上で良好な資料である。集落遺跡としては宇治市寺界道遺跡、八幡市内里八丁遺跡を取り上げた。これらの遺跡では出土量がやや少ないが、一括性のある資料もあり、検討対象とした。集落遺跡にはこのほかにも城陽市域で正道遺跡や芝ヶ原遺跡などがある。

以上の資料から次のようなことが確認できる。口径12.5～13cmぐらいでヘラケズリ調整を省略するものが現れる。ただしヘラケズリ調整を施すものは口径11.5～12cmぐらいまで残る。横穴墓では口径11cm前後を境に副葬されなくなるようで、11cm以下のものはそれほど認められない。一方、集落や窯跡では口径11cm以下のものも比較的多く認められる。隼上り瓦窯跡では、灰原資料には口径9～12cmのものがあり、最終操業面では口径9.5～10.5cm前後のものがある。



第6図 大和地域出土杯H法量分布図

④大和地域(第6図)

基本的に奈良盆地のうち、飛鳥地域を除いた地域が対象である。集落遺跡や窯跡の資料が少なく、古墳や横穴などの墳墓資料が多い。また、榛原町など奈良盆地の東に位置する丘陵部でも当該期の古墳の存在が知られている。ただ、飛鳥時代の須恵器という観点から総合的に検討されたことは少なく、古代土器研究会による資料収集と検討があるにとどまる。^(注14)

資料の検討は、古墳出土資料が中心にならざるを得ない。ここでは筆者が実見することのできた資料を中心に取り上げることにした。丹切34号墳・石上北A5号墳・ホリノヲ2号墳・ホリノヲ5号墳・忍坂2号墳・葛城市三ツ塚9号墳・同三ツ塚10号墳・同三ツ塚11号墳である。一方、豪族居館的な遺構、あるいは初源的な官衙遺構と思われるものが近年、見つかっているが、検討を加える段階までは至っていない。この点は今後の検討課題としたい。

以上の資料から次のようなことが確認できる。口径11～11.5cmぐらいでヘラケズリ調整の省略するものが現れる。古墳では、山城地域と同様に口径11cm前後を境に副葬されなくなるようで、11cm以下のものはほとんど認められない。したがって、山城・大和両地域では、口径11cm前後の段階を境に副葬される杯類、あるいは須恵器の器種構成に変化が現れたものと思われる。この点は、この時期の土器様相の変化、あるいは当時の人々の土器の副葬という行為に対する意識の変化を表す可能性があり、重要である。なお、飛鳥地域では10～11cm代の杯Hも比較的多く出土しており、最終的には9cm代のものも認められる。

4. 若干の検討

a. 杯Hの地域性について

各地域の資料を検討した結果、いずれの地域においても、相対的に口径の大きなものにヘラケズリ調整が認められ、口径の小さなものほどヘラケズリ調整の省略が認められた。つまり、法量の縮小と調整手法の省略には相関関係があると考えられる。しかし、ここで注目しなければいけないのはヘラケズリ調整の省略を確認することのできる杯Hの口径が地域ごとに異なっているという点である。特に丹後地域と飛鳥地域の違いは明瞭である。このように「法量の縮小と調整手法の省略の相関関係」が地域ごとに異なっているという事実注目するならば、このことこそが地域色の存在を示しているといえるだろう。この地域色の広がり、地域ごとの調査の粗密はあるだろうが、第3～6図にみられるように、少なくとも令制国程度を単位として存在しているようである。

ところで、菱田哲郎氏は、近畿地方北部の事例をとりあげて古墳時代後期(6世紀代)に発現してくるような地域色(菱田氏は地方色と呼称されている)の存在を指摘しておられる。^(注15)こうした状況は、飛鳥時代(7世紀代)においても、継続して存在していたと理解すべきであろう。その場合、菱田氏が指摘されているように、地域色が具体的に発現した須恵器「の形態や技法には古相をとどめる」と考えるならば、当該期においては、ヘラケズリ調整の認められる相対的に法量の大きいものが古相の特徴を示しており、ヘラケズリ調整の省略された相対的に法量の小さいものがより新相の特徴といえる。

以上のように地域色の存在を認めるならば、そのことの意味するところは重要である。なぜならば、飛鳥地域と異なる土器様相(=地域色)が認められるということは、飛鳥地域の土器様相の変化とは一致しないということであり、飛鳥地域の編年を他地域には援用できないことになるからである。したがって、従来とは異なった視点で各地の土器編年とその年代を考えていく必要がある。

b. ヘラケズリ調整の出現地域について

ヘラケズリ調整の省略が最も早く出現する地域について検討してみよう。結論的に述べるならば、それは消費地では政治的中心地である飛鳥地域、生産地では陶邑古窯址群と考えるのが妥当であろう。

特に前者に関連して、今回取り上げた飛鳥寺下層資料や山田道黒褐色土出土資料において、杯H蓋の天井部や杯Hの底部にヘラケズリ調整を施すものの粗雑な調整のためケズリ残された部分が存在する個体が複数認められた。^(注16)これらの資料は「ヘラケズリ調整を施すもの」から「ヘラケズリ調整を省略するもの」への過渡的な資料ととらえることができる。一方、丹後地域などではこうした過渡的な資料は、管見による限り確認できていない。し

たがって、最も早くヘラケズリ調整の省略が開始されたのは飛鳥地域と考えてよさそうである。

c. ヘラケズリ調整省略の年代について

そこで、杯Hの法量ではなく、ヘラケズリ調整の省略によって併行関係を考えるための指標とするならば、飛鳥地域の編年によってその出現は、第2図から川原寺下層や山田寺下層出土資料を遡り得ない。つまり、丹後地域などで見られるヘラケズリ調整の省略が認められる口径14cm程度の杯Hは、古く見積もっても川原寺下層資料を年代的に遡らないということになる。

一方、生産遺跡においても7世紀代の杯Hの暦年代を考える上で重要な資料として、大阪府狭山池1号窯灰原出土資料がある。^(注17)同灰原は、AD616年に伐採された材を木樋として利用していた狭山池第1次堤体の上層に形成されたものであることから、少なくとも灰原下層・中層出土資料はAD616年以降に生産されたことが確実な資料であるという。同灰原資料には、天井部や底部を全面ヘラケズリ調整するものや部分的にケズリ残すものが大半を占め、ヘラケズリ調整の省略が認められるものはごくわずかであるという。

したがって、口径11～12cmで回転ヘラケズリ調整の省略が認められる杯Hの出現年代は、狭山池1号窯跡の例から616年よりも新しく、山田寺下層の例から641年までには出現していたとする年代観を導き出すことができる。^(注18)

以上の検討から、飛鳥地域におけるヘラケズリ調整の省略された杯Hの出現は、7世紀の第2四半期頃と考えるのが妥当ということになる。したがって、各地域のヘラケズリ調整の省略が出現するのもこの時期以降と考えられる。ただし、これはあくまでも上限であって、すでに指摘しているように、地域によっては「ヘラケズリ調整の省略」の採用が時間的に遅れる可能性は十分にあると考えられる。

d. 杯Hの終焉について

本稿で検討してきた法量と調整手法の省略という視点から、地域ごとの杯Hの終焉についても言及したい。

すでに指摘されているように、飛鳥地域では、杯Hの法量は時間の経過とともに縮小し、再び口径が増大することがないまま、消滅する。そこで、各地域においても杯Hの口径が最小となった段階が、杯Hの終焉の時であると考えられる。ちなみに飛鳥地域において杯Hの最小の口径は9.5～10cmで、水落遺跡で確認されている。

まず、丹後地域の集落遺跡や窯跡では、量的に確認でき、法量をもっとも小さくなるのは口径が12cm前後である。一方、墳墓では、12cm以下の杯Hも出土するが、その量は非常に少ない。このことから、12cm前後が終焉に近い口径と考えたい。

丹波地域では検討した資料が少ないので、確定的なことはいえないが、壺ノ谷窯址群の出土資料から10.5～11cm程度を最小値とするようである。壺ノ谷窯址群が在地の生産遺跡とすれば、このぐらいの値が終焉段階の口径と考えられる。

山城地域では、墳墓資料で口径10.5～11cmぐらいを最小値とするが、集落遺跡や窯跡では9.5～10cmのものが認められる。山城地域では9.5～10cmぐらいが終焉段階の口径と考えたい。

大和地域の墳墓資料では口径10～11cm前後を境に杯Hがみられなくなるが、集落遺跡や窯跡の資料が少ないため、地域的な杯Hの終焉段階の口径は明らかではない。おおむね飛鳥地域と同様と考えていいだろう。

なお、杯Hの終焉時期は、飛鳥地域の土器編年の年代観を援用すれば7世紀の第3四半期でも後半(660年代)と推定される。ただ、この年代観もあくまでも上限であって、各地域の杯Hの消滅が飛鳥地域よりも遅れる可能性は十分に^(注19)ある。このことは丹後地域の堤谷窯跡の灰原の沿い資料からもその可能性の高いことが指摘できる。

5. まとめ

今回は検討の対象を杯Hに絞ったため、他の器種の具体的な様相については明らかにし得なかった。この点は一部拙稿でもふれているので参照して^(注20)いただきたい。本稿での検討結果を改めて以下にまとめてみたい。

まず、この時期にみられる杯Hの「法量(=口径)の縮小」は、丹後地域と飛鳥地域を比較してみると、大きな差がみられた。しかし、飛鳥地域に近づくにしたがってその差は小さくなっていくようである。これらのことは「ヘラケズリ調整の省略」が確認できる法量も地域ごとに異なるという点からも傍証される。また、「ヘラケズリ調整の省略」は飛鳥地域で最も早く出現したと考えられ、丹後地域などの周辺ではほぼ同時か、やや遅れて出現したと考えられる。

今回、検討を行った「法量の縮小」と「ヘラケズリ調整の縮小」という2つの指標により、飛鳥地域の編年に引きずられがちであった地域の編年を再検討し、新たな編年と年代観を提示することが可能となるはずである。また、重要な事実として、杯Hの終焉段階における口径が地域ごとに大きく異なっている点がある。このことも、これまで述べてきたように、飛鳥時代の杯Hの変化の過程が地域ごとに異なっていたことを表す指標としてとらえることができる。さらに「法量の変化と調整手法の省略の相関関係」に注目して、地域の窯跡から出土する杯Hを検討するならば、地域色の広がりを検討していくことも可能であろう。

最後に、今回の検討を通じて気がついた点を1つ指摘しておきたい。検討を加えたいずれの地域の墳墓においても、出土した杯Hの口径が、集落遺跡や窯跡で確認できる口径の最小値よりも大きいことがわかった。このことは、墳墓における杯Hの副葬が、杯Hの消滅より1段階早くに終了していたと考えることができる。つまり、古墳に副葬される杯Hが新出の杯Gなどに取って代わられたのであろう。この事実から、古墳出土土器群を利用した編年は、必ずしも集落遺跡における実態を表さない可能性が高いことになり、方法論的に再検討を必要とする^(注21)。

以上、飛鳥時代の須恵器杯Hの検討を行ってきた。今回は、できるだけ比較しやすい指標を取り上げて、地域ごとの違いを明らかにするよう努めた。ただ、本来ならば実見すべき資料の多くが実見できていない。この点については今後の反省点としたい。

資料調査にあたり、小池香津江・吹田直子・西口壽生の各氏には大変お世話になった。なお、紙幅の都合で、本稿で取り上げた遺物の実測図、ならびに報告書名については一切省略した。ご寛恕を乞う次第である。

(つつい・たかふみ=当センター調査第2課調査員)

- 注1 杯Hの名称は奈良文化財研究所の器種名である。杯Hとは、蓋を受けるための受け部を杯身に持つもので、古墳時代においてはもっとも通有な器種である。
- 注2 菱田哲郎ほか「八代宮ノ谷窯跡出土の須恵器」(『鬼神谷窯跡群』(『竹野町文化財調査報告書』第7集) 竹野町教育委員会) 1990
- 注3 田辺昭三氏による陶邑古窯址群の編年研究としては次の報告がある。田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ)1966、田辺昭三『須恵器大成』(角川書店) 1981
- 注4 特に第5回シンポジウム『7世紀の土器』(1997年11月22・23日開催)は大きな成果を上げたと考えられるし、その資料集は、当該期の土器集成としては十分すぎるほどの内容を持っていたと考える。古代の土器研究会『7世紀の土器』
- 注5 佐藤隆「難波地域の新資料からみた7世紀の土器編年」(『大阪歴史博物館研究紀要』第2号(財)大阪市文化財協会) 2003 3～4頁
- 注6 この2要素を取り上げてグラフ化を試みたものが下記文献に公表されており、グラフ作成に当たり参照した。深澤芳樹「山田寺下層の土器について」(『山田寺発掘調査報告』(『奈良文化財研究所学報』第63冊 奈良文化財研究所) 2002
- 注7 西弘海「土器の時期区分と型式変化」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』(『奈良国立文化財研究所学報』第31冊) 奈良国立文化財研究所) 1978、西弘海「法隆寺出土の7世紀代の土器」(『法隆寺防災施設工事発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所・奈良県教育委員会) 1985
- 注8 西口壽生「遺物 小結」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』(『奈良国立文化財研究所学報』第55冊) 奈良国立文化財研究所) 1995、注6文献など
- 注9 川原寺下層S D02や甘樫丘焼土層S X037では、東海産と推定される須恵器杯Hが出土してい

るという。注6 深澤文献参照。

- 注10 橋本勝行「丹後」（『古代の土器 5-2 7世紀の土器（近畿西部編） 古代の土器研究会』1997、同「丹後における7世紀の土器」（『太邇波考古』第12号 両丹考古学研究会）1999、筒井崇史「丹後地域における飛鳥時代から奈良時代前半の土器様相について」（『京都府埋蔵文化財情報』第79号 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2001、同「古墳時代的土器様相から律令的土器様相への変化と集落の展開について」（『第10回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 住まいと移動の歴史』 京都府埋蔵文化財研究会）2002
- 注11 八瀬正雄「丹波」（『古代の土器 5-2 7世紀の土器（近畿西部編） 古代の土器研究会』1997、同『中丹における7世紀の土器』（『太邇波考古』第12号 両丹考古学研究会）1999
- 注12 古閑正浩「桂川右岸地における飛鳥・白鳳時代の須恵器編年」（『宝菩提院廃寺瓦窯跡』（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第48集 （財）向日市埋蔵文化財センター）2001
- 注13 畑中英二「隼上り窯跡と豊浦寺」（『京都考古』第85号 京都考古刊行会）1997、佐藤隆「四天王寺の創建年代について」（『飛鳥・白鳳の瓦と土器』 帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会ほか）1999
- 注14 相原嘉之「大和 飛鳥・藤原地域の土器」、池田裕英・金田明大・佐々木好直「大和 集落・窯跡・古墳」（『古代の土器 5-1 7世紀の土器（近畿東部・東海編） 古代の土器研究会』1997
- 注15 菱田哲郎「須恵器地方色の発現過程」（『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会編）1992
- 注16 筆者の観察所見による。資料の実見に当たっては奈良文化財研究所西口壽生氏にお世話になった。なお、第2図ではすべてヘラケズリ調整が施されているものとして扱っている。
- 注17 狭山池調査事務所編『狭山池 埋蔵文化財編』（1998）ただし、本資料は実見していない。
- 注18 ただし、飛鳥地域出土の資料が狭山池1号窯跡から供給されたものかどうかは証明されていない。
- 注19 この点に関しては、早く、山陰地方の鳥取県陰田横穴群出土資料の分析を通じて杯Hが藤原宮期、すなわち7世紀代末まで残存していることが指摘されている（米子市教育委員会編『陰田横穴群』1984）。
- 注20 注10筒井文献参照。
- 注21 古墳出土土器のみで制作された編年と集落遺跡出土土器で制作された編年とは一致しない点は拙稿を参照されたい。筒井崇史「古墳時代的土器様相から律令的土器様相への変化と集落の展開について」（『第10回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集 住まいと移動の歴史』 京都府埋蔵文化財研究会）2002

